

生涯学習とイノベーション

有 本 章
(くらしき作陽大学)

生涯学習とは何か

生涯学習は、社会の持続発展に必要な学習が「個人の社会化」の中に組み込まれた機能である半面、個人が成長発達して社会の一人前の存在になる「社会の個人化」の中に組み込まれた機能である。種々の世代や集団によって成り立つ社会は、それらを連続的に社会化させる役割を期待されるし、その阻害は社会の存続を思わぬ危機に陥れるのは避けられない。社会にとっては、個人の誕生から死亡に至るまで、乳児、幼児、児童、青年、成人、中年・壮年、老年などの発達段階であるライフステージに応じて適切な教育課題と学習課題を用意することが欠かせない。それは一方では現在の社会の伝統や文化をそのまま維持せんとする「保守的機能」であると同時に、他方では現在の社会を変革せんとする「革新的機能」である。社会の側からのこの種の性格をもつ意図的な教育課題が機能せず、個々の発達段階における学習課題が用意されなければ、所期の生涯学習は個々の発達段階の水準において機能障害に陥り、所期の社会発展は不十分な状態に帰結せざるを得ない。

翻って個人にとっては、社会からの期待に受身的に対応するのではなく、生涯にわたって持続的に学習し、創造的に社会へ参画する能力を涵養することが期待される以上、自主的かつ主体的に学習する意欲、動機、能力が不可欠であるし、誕生から死亡に至るライフサイクルの全過程に即した持続的な

意欲、動機、能力を形成するという課題が横たわっている。社会が所期の理念を追求して「社会的アイデンティティ」を形成するように、個人もまた理想的な自己像を追求することによって、「個人的アイデンティティ」を形成するのであって、前者からは生涯教育を媒介とした生涯学習の課題が作用し、後者からはそれとの関係での相互作用の営みが成立する。

こうして、生涯学習は社会と個人を連結する役割を担うため社会にとっても、それを成り立たせている個人にとっても重要な役割を担う概念である。社会が個人に生涯学習を期待し個人が生涯学習を介して社会発展に寄与するという相互作用の関係を抜きにしては、社会も個人も連結を喪失して有機的な関係を構築することは不可能であるし、社会の活力も個人の活力も創造することはできない。

したがって、社会や個人の生涯学習を持続させる学習力を基礎とした「生涯学習力」の形成は、具体的には個人が出会う個々の社会である家庭、学校、地域社会、職場などで醸成される学習力を基礎に培われる以上、社会が個人に生涯学習力を醸成する視点から、家庭、学校・大学、地域社会、職場の機能の見直しが欠かせない課題となる。ここでは、後述のとおり、主として大学を中心にこの種の生涯学習力に繋がる学習力を考えてみる。

社会変化のインパクト

社会は、地域社会、国家社会、国際社会などとさまざまに呼称されるように、その範囲は広範である。上で述べた家庭、学校、職場なども個人の集まった集団を単位とするれっきとした社会であるし、それら下位社会の地域社会をはじめ上位社会の国際社会に包括されている事実は否めない。したがって、社会と個人と言っても、個人はこれら大小の集団に重層的に位置し関与しながら社会化を遂げていると言わなければならない。逆に言えば、個人は身近な社会で生活しながら、それを取り巻く重層的な多様な社会から不断に刺激や影響を受けて多様な役割をこなしつつアイデンティティを形成しているのである。

上で述べたように、生涯学習が社会の側と個人の側を結びつける連結の機

能を担うとすれば、社会の側から規定される生涯学習の概念は大小さまざまな社会変化によって影響を受ける。実際、巨視的にみれば社会は農業社会、産業社会、情報社会、知識社会といった変化を過去から現在にかけて迎えてきたのであるから、その変化に呼応して生涯学習もまた変化すると言える。

農業社会は過去、現在、未来の変化が緩慢な「単純再生産」の時代であるから、社会変化への対応は豊富な経験を積み一定量の知識をそなえた大人や老人が若者に対して優位に立つ社会であり、そこではジェロントクラシー（老人支配）が支配的であるとみなされるだろう。余剰や余裕を産出する生産力を持たない社会では大人は存在しても、子供や青年は無きに等しい。19世紀に子供が発見され、義務教育が制度化されるまでは、社会の側からも個人の側からも「中世大学」は別として組織的な教育や学習はあまり発達しなかったと言える。

これに対して、エネルギー革命と科学主義が組み込まれ、「創造的再生産」の時代に入る産業社会では、分業化や専門化が進行するのに対応して学校が発明され、幼少期から青年期にかけて長期のスクーリングが制度化され、就職以前に高度な知識や教養を身につける教育や学習が不可欠となる。この時期には、「子供の発見」によって子供が社会的に発見され、主として学校における教育が社会から要請されることになった。さらに20世紀中頃から情報社会の到来と呼応しながら、子供と大人の中間に位置する「青年の発見」によって、多くの人々が高校や大学での教育を期待され享受する時代を迎えた。情報の記憶や操作が中心であるこの時点では、それに見合う学校が発達し教育や学習の機会を個人に提供した。

さらに21世紀のような知識社会が到来すると、知識の分化と発展が一段と進行し、知識の性格を反映して新陳代謝と陳腐化が加速しはじめた結果、過去・現在・未来の連続性が困難となり、未来の予測困難性が強まるから、基礎的・汎用的な能力に裏付けられた基礎学力が必須となるのに加えて、キー・コンピテンシーが問われ、不断に変化する社会へ対応する創造力や問題解決力などの「考える力」あるいは「思考力型」の学力が欠かせないことになった。この時代には、人生の前半期に占める学校の比重が高まり長期のスクーリング化を来すのはもとより、後半期がリカレント教育や資格取得などとかかわってスクーリング化を招く度合いは拡大する。このことを通して、学校

に加えて大学の比重が一段と高まり生涯教育の一環に組み込まれるに至り、それと表裏の関係をなす生涯学習の重要性が浮上し、社会にとっても個人にとっても生涯学習に意識的に取組み、対応することが欠かせない時代へ突入することになる。

知識社会の生涯学習と大学改革の関係

歴史的に見れば、生涯学習と学校は密接な関係がある。義務教育としての小学校や中学校の発達、子供の学習を学校の中で制度化することに成功をおさめた。学校は教育の専門機関として制度化され発達し、社会の維持機能と社会の革新機能の両方を組み込んだし、「教育—学習過程」を通して、教育者(教員)に対する学習者(児童生徒)の存在を明確にした。しかし大学の予備門として発達した「下構型学校体系」の中の学校は大学受験能力を訓練する場となって、伝統的に詰め込みや暗記能力を重視するきらいがある。学校に限らず、19世紀までの大学は「暗唱」中心であったのは、その証拠の一端を示す。

現在の大学ですら、こうした伝統から脱却していない傾向が見られる。例えば、現在の日本の大学は、卒業資格124単位という「単位制」があるにもかかわらず、160単位以上が常態という現実が跋扈するのはその証左であると言わなければならない。1/3の授業と2/3の予習・復習が必要だが、高校並みに前者のみの1/3に終わっている証拠である。124単位は、1日8時間の学習時間を確保することを基礎に計算されている以上、それ以上の単位取得は8時間超の学習時間を必要とする。実際には、ある国際比較調査によれば、日本の学生の学修時間は5時間未満であるから、そこでは学生が予習や復習を行う余裕は与えられているとは言えない。学校型の詰め込み教育に従属した学習が行われている限り、考える力は醸成されない仕組みが成立している。大学におけるこの種の詰め込み型の教育は、大量生産大量消費の産業社会に発展した学校観の延長線上にあると言えるだろうし、これは大学よりも学校や専門学校に近いと看做されるであろう。

日本では中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」(2005年)以来、

「知識基盤社会」(知識社会)では「知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる」と指摘し、しかも「性別や年齢を問わず参画することが促進される」と指摘しているように、「思考力」や「生涯学習」との接続が重要性を持つことが分かる。21世紀の知識社会型の大学は、学生が授業の内容を踏まえて自分で判断し考える力を醸成することが課題である。詰め込み型は入試に備える受験勉強であるが、予習・復習による「思考力型」は、知識社会の変転極まりない変化に対応する創造力や問題解決力を発揮する学力を求められる。学生が単に自分流に学習するのではなく授業を担保して学修するのである。

現在の大学改革では、旧来の「学習」(learning)ではなく「学修」(study)への転換が求められているとすれば、いまや形骸化した単位制の原点に立ち返ることにほかならない。実際、学習から学修への転換には、学生の学修に対するアクティブ・ラーニングをはじめラーニング・ポートフォリオ、グループ・ワーク、ディベートなど、教員の教授に対するティーチング・ポートフォリオをはじめシラバス、GPA、キャップ制、授業科目のナンバリング、オフィス・アワー、厳格な成績評価などが求められている。第2ラウンドを迎えた認証評価の点検項目にも、こうした「教授－学修」に焦点が置かれている。このように単位制の精神を教師と学生の両方がわきまえて教育改革が奏功すれば、大学で鍛えられた学修力は大学卒業後に社会に出ても生涯学習力に転移すると考えられるし、汎用性のある学力やキー・コンピテンシーと相俟って、自力で予測困難な社会変化の現実に対応しながら「生きる力」に転化し、主体的なアイデンティティの形成に繋がると考えられるであろう。もちろん、単位制の概念自体がアメリカ・モデルの移植であり焼き直しであるから、それを支える文化や風土と日本のそれとが異なる点を考慮すると、いくら形式的な移植を行っても、戦後何回も失敗したように定着するとは限らない、という危惧がある。

大学での改革は今始まったばかりであり、今後の展開が期待されるが、学習力から学修力への転換は、生涯学習との接続には未曾有の重要な改革であると解される。生涯学習と接続しない詰め込み型の学習力の完結ではなく、社会に出て生涯学習と接続して持続発展する思考力型の学修力の開拓なのであるし、大学の中に閉じられ自己完結した学力ではなく、社会に開かれた持

続可能な学力の涵養である。もちろん、大学のみでの改革は限界がある以上、大学へ入学する以前の主として高校での詰め込み型の教育や学習を生涯学習型へと転換する営みが必要であるし、さらにそれ以前の学校教育段階との十分な接続が必要であることは言うまでもあるまい。そのためには、システムレベルにおける生涯教育・学習政策との整合性を保持した大学教育・学習政策や学校教育・学習政策が必要であることも論を待たないであろう。

生涯学習におけるイノベーション

イノベーションとは新しいものを生産することであるが、上記のとおり生涯学習を社会と個人の間に成立する連結概念としてとらえると、とりわけ知識社会のイノベーションは生涯学習と接続し、同時に個人のイノベーションと接続することは見逃せない視点である。知識社会では、OECD が「知識基盤経済」を公表し、「ナショナル・イノベーション・システム」(NIS) が現代知識社会論の重要な構成要素になった1990年以来、こうしたNISが基礎となって大学の教育活動や学習がイノベーションの基になることになった。とくにEUを中心に生じた「リスボン戦略」「ソルボンヌ宣言」「ボローニャ宣言」などの一連の動きの中で知識基盤経済に適合した問題解決型の教育モードや学習が登場するに伴い、知識社会はイノベーションを重視すると同時に学校や大学における学習を重視することになった。日本における上記の中教審答申(2005年)以来の答申(2008年, 2012年)などによる高等教育改革の動きは、同様の方向性を辿りつつあるとみなされる。

知識社会のイノベーションは教育や学習のイノベーションと関係深い。実際、現在の大学は教育改革によってイノベーションを志向し、その中核である、従来の「教授→学習過程」を超えた「教授→学修過程」において、上で述べたように、新たな学習→学修イノベーションを生じているのである。

このような流れの中で、知識社会のイノベーションとの文脈において大学改革を通して生涯学習が重視される時代を迎えた現在、ライフサイクルが21世紀の後半に及ぶ学生たちが学習から学修への転換を果たし、生涯学習に接続するためのいかなる「思考力」の革新を達成するかは注目に値する。当

該人口の60%近くが大学進学に突入しつつある今日は、従来の学校卒ではなく学卒が社会の人口動態の主流になりつつある時代を意味するのであるから、彼らの学修力を基礎とした生涯学習力の形成の動静が今後の社会(地域社会、国家社会、国際社会)の行方を左右すると言ってもけっして過言ではあるまい。特に日本社会は、知識社会という他国と共通したイノベーションの課題に直面すると同時に、3.11の東日本大震災以後の経済、政治、社会、文化、教育など各界における復興・再建の課題が焦眉の急を告げているのであり、その未来へ向けての推進には新たな生涯学習力の形成との関係が深いはずである。換言すれば、「未来からの留学生」が知識社会のイノベーションの重責を担う生涯学習の今後の方向や質を占うカギを握っており、そのことを媒介にして社会の質的向上と個人の質的向上を左右するカギを握っていると言っても過言ではあるまい。

おわりに

以上、縷々述べてきたが、生涯学習は社会と個人の連結機能を有するから、社会にとっても個人にとってもアイデンティティを形成するために重要な役割を果たす。生涯学習が社会や個人の不可欠な機能である以上、社会変化と生涯学習との関係は大きい。知識社会の出現は知識の性格を反映してイノベーションを追求する中で教育や学習のイノベーションへの期待が大きく、知識社会に対応した生涯学習を追求する。知識社会の生涯学習に見合う生涯学習力の形成には、家庭、学校、地域社会など個々の社会が関与しているが、大学を事例にすると、考える力が欠如した従来の学校型の学習力から新たな学修力への転換が期待されている。大学でのこの「教授—学習過程」から「教授—学修過程」への改革の成否は知識社会における生涯学習のイノベーションを生涯学習力の形成を通して占う上で重要であり、その行方が注目されるのである。